



歳時記のある暮らし

二〇二三年

《八月》

蝉時雨が降り注ぐ夏の盛りとなりました。

皆様、おすこやかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

列車にて 遠く見ている 向日葵は 少年のふる 帽子のごとし 寺山修司

待ち望んできた久しぶりの帰省。駅に着くまでの車窓から見てきた、ゆうゆうと揺れる向日葵。まるで少年のころの自分が帽子を振っている、そんな情景でしょうか。

盆踊り、花火大会、じりじりと太陽が照りつける海、カブトムシやクワガタ採集、川遊びなど、夏は行事が目白押しです。一方で猛暑や熱帯夜が続き、体力を奪われ気力が衰えがちです。涼の取り方を工夫して夏の風情を楽しみましょう。

浴衣で夕涼み。夏祭へのお出かけだけではなく、普段も湯上りに気軽に着てはいかがでしょうか。吸水性がよくシランとしてサラリとした木綿の肌触りは夏ならではの心地よさです。

澄んだ音色で風を感じる風鈴。もとは仏教とともに中国から伝来した「風鐸(ふうたく)」という青銅製衣で、風向きや音の鳴り方で吉凶を占ったそうです。平安時代には貴族が魔除けとして使うようになり、江戸時代には涼を求めてガラスの風鈴が流行したようです。

竹や草などの自然素材。すたれやよしすは遮光しながら風を取り込みます。朝顔やへちまの蔓を絡ませると目に涼しげです。露霧吹きで水を吹きかけると風の涼しさが増します。水で涼を感じいるのも夏ならでは。睡蓮鉢のメダカや水草、たぶりの氷で冷やしたそうめんなどは目で涼を感じさせます。朝や夕方、玄関先やベランダに打ち水をする、気化熱の働きで

周囲の温度が下がり、水を打った場所の気圧が上がって空気が流れ風が生まれます。

汗を吹く 茶屋の松風 蝉時雨 正岡子規

青空に入道雲がむくむくと広がる火火天下、茶屋で一服していると蝉時雨が鳴り響くなか、ふと松葉が風になびく音がして涼しい風を感じ、熱い身体が休まる喜びが伝わります。

朝顔や つるべ取られて もらひ水 加賀の千代女

(裏へ続きます)

朝起きて井戸へ水を汲みに行くと、朝顔の蔓が釣瓶に巻きついています。朝の光を受けてみずみずしく透けるような花びらは、この世のものとは思えないほど美しく、蔓ははずそうともせず近所に水をもらいに行った。そんな花への優しさがこの句の見どころでしょう。

朝顔は、江戸時代までは青と白しかない素朴な花でした。それが今のように紫系や赤、絞り模様など色も形も様々で大きく華やかな花になったのは、江戸時代に「亦化朝顔」の栽培が流行したためです。豊かな自然に囲まれた日本では、草木を用いた園芸は身近な楽しみでした。江戸時代の日本は世界に冠たる園芸大国で、武士も庶民も家の軒先や路地裏で園芸を楽しみました。

花が大好きだった徳川家康、秀忠、家光は「花癖將軍」ともいわれ、諸藩の大名は参勤交代に際して將軍に喜ばれる立派な花を探して献上しました。このことから亦化朝顔もブームとなり、珍しいものが大好きな江戸の急交好家たちは、朝顔の栽培に手間暇を惜しまず情熱を傾けました。

朝顔は狭い軒下でも栽培でき、品種改良や育種技術を学ぶことで知的好奇心も満たされます。努力して栽培した作品は品評会で評価されました。好奇心旺盛な江戸の人々と、突然亦変異が結びつき多様な朝顔が生まれました。しかしその陰には、大里の朝顔が犠牲になりました。日本には針供養など、物にも感謝して供養する羽白慣があります。犠牲となった朝顔にも供養する場所があります。それは東京にある法明寺の「葬塚(あさがおづか)」という供養塔です。江戸の人たちの珍しい物への好奇心、「おもしろいことにかける強い情熱と根気、それこそが私たちが学ぶべき」¹「粹の心」なのかもしれません。

大暑から始まった八月は、立秋を経て秋の気配が漂う処暑へと季節が進みます。寒蟬(ひぐらし)が鳴きはじめたら夏も終盤。朝晩の暑さが徐々にやわらいでいきます。

厳しい残暑はまだ続きます。冷房の活用、こまめな水分補給、栄養バランスの良い食事、十分な休養と質の高い睡眠で、お元気に夏を乗り越えてください。皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係 お手紙担当 久郷 直子

